

吉田城址 発掘現場公開資料

令和3年8月21日（土） 主催：豊橋市文化財センター

※荒天の場合、翌22日（日）に順延 時間 10:30～12:00、14:00～15:30

吉田城について

戦国時代の地方都市・今橋に築かれた今橋城（いまはしじょう）は、後に名を「吉田城」と改められ、東三河地方を支配する政治の中心を担っていきました。全国的なお城ブームも追い風となり、平成29年には（公財）日本城郭協会によって『続日本100名城』に選定されるなど、豊橋市を代表する文化財として、市内外から多くのお城ファンが訪れるようになりました。

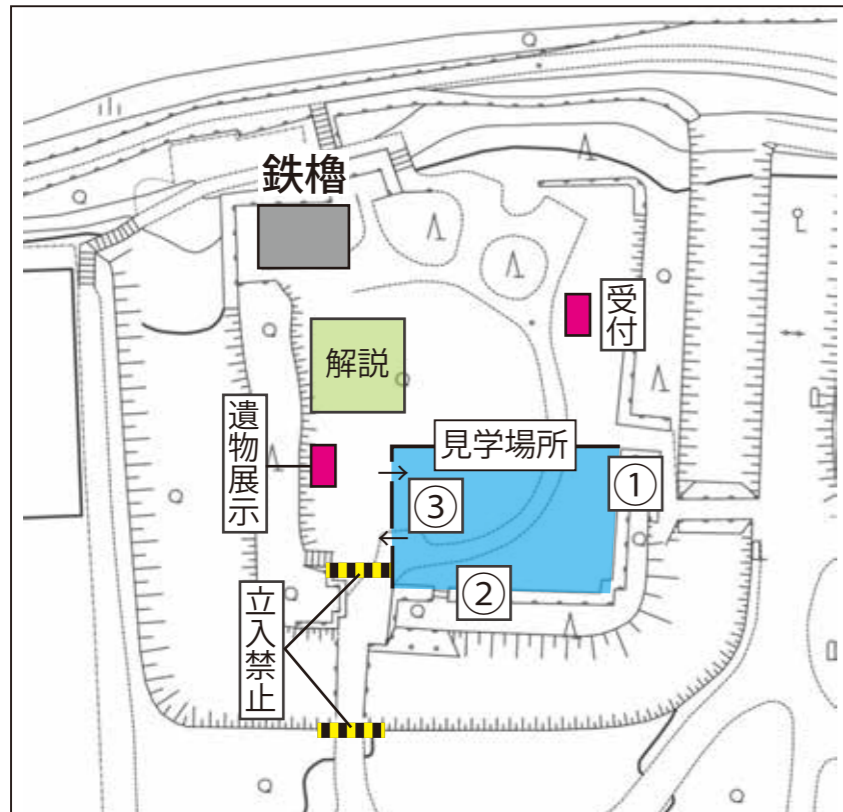
このように知名度が上がる一方で、廃城から150年以上を経て、石垣や土塁などの貴重な遺構に損傷が蓄積しつつあります。令和元～3年度には、立て続けに石垣が崩落し、幸い人的被害はありませんでしたが、吉田城の遺構が深刻な状況にあることが広く知られる様になりました。

これら崩落箇所に通ずるのは、近年まで直上に大木が生育していたことです。全国的にも樹木を原因とする石垣の崩落事例は数多く、更には頻発する大雨によって、被害が広がる可能性があります。よって今後は、吉田城址の遺構保護と、公園利用者の安全確保のため、経過観察を進めながら樹木の伐採や間伐、また伐採後の切株の管理や雨水対策を講じ、予期し得る危険を軽減していくことが重要です。

今回の現場公開では、令和元・2年度崩落箇所の解体修復の状況をご覧頂き、石垣が置かれているリアルな現状を見て学んで頂くことで、吉田城址の保存と活用に向けたご理解を頂く機会になればと思います。

説明会場と現地見学の方法

新型コロナウイルス感染拡大防止及び見学者の安全確保のため、解説場所と見学場所を分けると共に、見学場所への入場は50名ずつに制限しています。スタッフの指示に従い、安全な運営にご協力下さい。



各見学ポイントの内容

学芸員による解説

調査を担当した学芸員が、成果について解説します（15分程度）。

①令和元年度部分崩落箇所の調査

解体発掘調査中の石垣内部の様子を見学できます。

②令和2年度石材転落箇所の調査

石垣を崩落させる原因となった、樹木の影響について見学できます。

③新たに発見された石垣刻印

解体された石垣に刻まれていた刻印を見学できます。

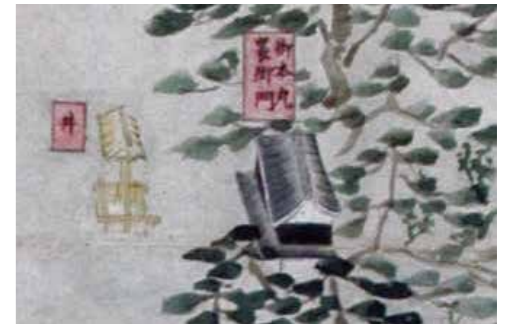
重要：あなたの受付番号

※安全管理のため、見学場所への入場の順番は、上記番号をもとにご案内します。入れる順番になり次第、現地スタッフが番号をアナウンスしますので、それまでは熱中症等に注意し、お待ちください。

見学ポイント1 令和元年度に部分崩落した裏門石垣

石垣の概要

裏門は、本丸東側の出入り口となっていた場所です。江戸時代には、門の上に長屋状の檜を構えた『檜門』が築かれていました。石垣の規模は幅約5.0m、高さ約2.8mを測ります。チャートを中心に、花崗岩や雲母片岩の自然石や素割石が用いられており、構築技法としては『打ち込み接ぎ』に分類されます。令和元年6月の大雨の影響により崩落し、今年5月から修復工事に着手しました。



・『本丸二之丸略絵図』に描かれた裏門。
江戸時代後期以降の姿（豊橋市中央図書館蔵）

崩落の原因

この石垣が崩落した原因として、①石垣上に生育していた大木の影響と、②大雨の影響、が挙げられます。まず①については、石垣の崩落以前には、石垣直上に高さ約13mのクロマツの大木が生育していました。石垣は本来、大きな樹木は生育しないよう管理されている構造物でしたが、廃城から150年以上を経た吉田城址では、いたる所で大木となった樹木が確認できます。

これら樹木は、恒常的に石垣に不均衡な過重を与え続け、また風を受けてテコの様にしなることで、根元部分では特に深刻な影響が生じます。更に石垣内部に侵入した樹根が、内部構造である裏込め石や土塁部分を損傷することで、雨水の排水などにも悪影響を及ぼします。このように、長期間にわたり損傷が蓄積し続けた石垣の内部に、②令和元年6月の大雨により大量の雨水が侵入し、最終的には内部からの水圧によって、崩落が発生したと考えられます。最も典型的な原因により、崩落が生じたと言えます。



・崩落直後の状況。石垣中央下部の2石が転落した。青塗り部分が、転落した石材本来の位置。右写真の大木の過重で、石垣全体に逆三角形の歪みが生じ、その最下部の石材が転落したことが分かる。崩落した石材の大きさは、長さ0.8m×幅0.4m×厚さ0.45m程度。



・石垣直上に生育していたクロマツの大木。長年の過重や、樹根による侵食で石垣に損傷が蓄積し、最終的に大雨で崩落した。この崩落をきっかけに吉田城址の石垣保護の取り組みが始まり、令和元年10月にはこのクロマツを含め、石垣上の大木伐採による負荷軽減が図られた。

発掘調査の流れ

崩落した石垣を修復するためには、石垣を上段から解体した上で、積み直す必要があります。この解体に際しては、石垣本来の内部構造を記録として保存し、積み直しや今後の整備の基礎資料として活用していきます。しかしながら、今回の石垣は高さ約2.8mと比較的規模が大きく、一度に全ての発掘調査を行うことは不可能であることから、「最上面の発掘調査」→「上半部の解体」→「中段の発掘調査」→「下半部の解体」→「最下面の発掘調査」という手順で実施することになりました。

発掘調査の成果

調査成果については、今後行う最下段の発掘成果を踏まえて、石垣の構築年代や構造、崩落原因を精査していきます。したがって詳細な検討は今後進めていくことになります。現在確認されている成果の一つとして、石垣の芯となる土塁の最下部から、安土桃山時代の瓦が大量に出土しています。このことから、江戸時代初期の吉田藩主・松平忠利（在城1612～1632年）の時代に、従来の石垣を解体し、新たに石垣を構築した可能性が考えられます。



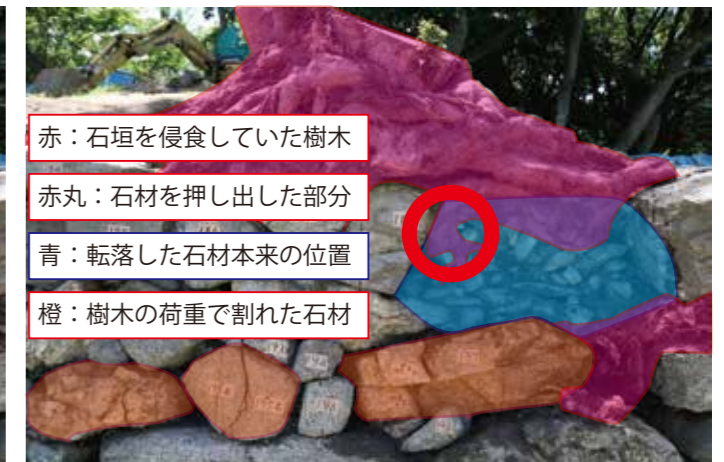
- ①発掘調査開始前の様子。上部に厚く土砂が堆積し、写真②で見られる塀礎石は完全に埋没してしまっている。
- ②1回目の発掘調査を完了した状態。最上段にまっすぐ延びるのは、かつて塀を支えていた礎石。また、石垣の内部構造である裏込め石が全体に広がっていることが分かる。
- ③2回目の発掘調査の状況。裏込め石だけでなく、石垣の芯である土塁が確認できる。土塁を深掘りした最下部から、写真⑤の瓦が出土した。
- ④写真③に色付けし解説したもの。
- ⑤土塁最下部から出土した瓦。いずれも安土桃山時代の遺物である。軒丸瓦は巴文を意匠とするが、模様の型となる范木の痛みのため、凹凸が薄れている。軒平瓦は桐文を意匠とし、豊臣秀吉が朝廷より下賜された紋を、更に池田照政（輝政：1590～1600在城）に与えたもの。

見学ポイント2

令和2年度に石材が転落した石垣

石垣の概要と石材転落の原因

本丸の南面にあたる、幅約19.5m、高さ約3.8mの石垣です。令和2年6月に、西側最上部の石材1石が転落しました。令和元年度の部分崩落箇所との違いは、直前に大雨の影響を受けていないにもかかわらず石材が転落した点です。転落の原因として、この石垣上部には、令和元年度に伐採される以前はモチノキの大木が生えており、伐採後も旺盛にヒコバエが成育するなどしていました。解体修理に先立つ部分的な発掘調査と崩落箇所の精査を行った結果、この大木の根が石材を背面から押し出ししながら成長を続けたことで、転落を引き起こしたことが確認されました。



左：石垣を侵食しながら成長した樹木の状況 右：左の写真の色付けし解説したもの。石垣上部に生育していたモチノキが、石垣を圧迫するだけでなく、荷重によって石材そのものが割れてしまうなど、様々な問題の原因となっていたことが分かる。



・発掘調査を終えた際の状況。調査前は一面が根に覆われていた。長く伸びた樹根が石材を覆ったり、背面から動かしていることが分かる。

・石材転落時の状況。フジが繁茂し、石垣を覆い隠している。こうした状態では、転落する前に危険を予知することはできない。

見学ポイント3



新たに発見された石垣刻印

石材を切り出し、運び、積み上げる各過程で刻まれた図柄や文字を刻印と言います。普請に係った大名や家臣、あるいは工人など、様々な人々が用いました。今回発見された刻印は花崗岩に刻まれています。

なお、従来は刻印が刻まれた石材の存在から、「吉田城の花崗岩は名古屋城天下普請の際の残石を用いた」とされてきましたが、近年では天下普請以外の城でも刻印が確認されており、再検討が必要です。